



〈報告〉第109回例会 特別講演会（札幌エルプラザ 2023/11/5）

カティンの森のヤニナ～独ソ戦の闇に消えた女性飛行士 河出書房新社 2023.3

著者：小林文乃氏／特別ゲスト：富田武氏

トークショーを終えて(1) 小林 文乃

3月の刊行以降、私は東京と京都でトークショーを行い、札幌が三度目の機会でしたが、今回は会場がかつてない熱気に包まれ、私自身、稀有な体験をしたと感じています。特に、最後の質疑応答のレベルの高さには驚きましたし、皆さんの質問や感想から多くの気づきを得ることができました。

なぜ、これほどの熱量となったのか。近年のロシア情勢の緊迫感からでしょうか。プロニスワフ・ピウスツキをはじめとする、北海道とポーランドの関係の深さもあるのかもしれません。会が終わり、私が思うのは、北海道民ほどいまこの本を真剣に読んでくださる方たちはいないのではないかと、ということです。

取材をはじめた頃「なぜそんな大昔の事件に興味をもっているのか」と、たくさんの人に聞かれました。

© 河出書房新社 2023.3.15発行 定価 2,200円（税別） ISBN 978-4-306-10000-0

トークショーを終えて(2) 富田 武

11月5日午後に行われた北海道ポーランド文化協会主催のトークイベントで、なんで私が「カティンの森 虐殺事件」で小林文乃さんのお相手を務めたかという、彼女の本の最初の読者として感想を自分のFBに発表しただけではありません。

事件を初めてソ連の責任と認めた1992年11月19日の政治局決定特別ファイルを『イズヴェスチヤ』で（滞在中のモスクワで購入して）読んでいて、ソ連による国際法違反の2万人を超えるポーランド将校らの虐殺自体に憤った体験があったからです。

またその後プーチンが首相期の2010年に花束を持って現地に追悼に赴いたのに、2014年の第1次ウクライナ危機の少し前あたりから、1940年にエストニアその他（1939年9月独ソ不可侵条約秘密協定に基づいて）ソ連に併合された国々で、国のナチからの解放に貢献したとして建てられたソ連軍兵士の像が次々と破壊、撤去されたことに危機感を強め「歴史修正主義」（元はドイツ歴史学会でナチ評価をめぐって用いられた用語）を乱用し「大祖国戦争」神聖化に努め、ウクライナ侵攻中の2023年4月には、ついに「虐殺はドイツ軍

© 河出書房新社 2023.3.15発行 定価 2,200円（税別） ISBN 978-4-306-10000-0

トークショーを終えて(3) 園部 真幸

トークショーは参加者43人、うち一般参加者20人と、お二人の講師への関心の高さがうかがわれました。

小林さんはヤニナの取材で訪れたポーランド各地

誰も知らないし、覚えてもないよ、と。しかし、執筆の途中でウクライナ戦争が起こり「カティンの森事件」は再び脚光を浴びることとなったのです。

今回の富田先生のご講演は、その意味でもタイムリーで、衝撃的な内容でした。ウクライナ戦争以降、ロシア側は「カティンの森事件」の犯行をふたたび否定し、あれはナチスの仕業だったと言い出したそうです。

まるで旧ソ連時代に戻ってしまったかのような一連の動きに、戦慄を覚えたのは私だけではないはずです。北海道の方々も、カティンの森で死んだヤニナ・レヴァンドフスカの人生を、より近い存在として感じてくださったのではないのでしょうか。

この本は、たった一羽の鳥を追った、私の小さな旅の記録です。あの時代に、ひとりの女性が精いっぱい自分の人生を生きた——それを伝えるための私の旅は、まだ続きます。 （こばやし・あやの）

の仕業」という正反対の立場（1943～92年）に、新しいアーカイヴ文書が発見されたと称して戻ったのですが、それらは全てニュルンベルク裁判の「継続裁判」（いわばBC級戦犯裁判）で論駁されたものでした。

ソ連による国際法違反の事案はこのように改作、捏造されたのですが、日本も無関係ではありません。1992年に「戦犯」から名誉回復された秋草俊（関東軍情報部長）、瀬島龍三（関東軍作戦主任参謀）、峯木十一郎（南樺太第88師団長）が昨年半ば（外務省プレス・リリースは本年1月）「戦犯に時効はない」という屁理屈で取り消され、しかもなぜこの三人か？の説明もありませんでした。

私は半世紀近くソ連研究をやってきたので、ある意味では「慣れている」のですが、「歴史的事実の政権の都合に合わせた歪曲」は絶対に許せません。

二人の講演後に小林さんと私に対する的確な質問がありましたが、二人のレジュメともども割愛します。

体調不良の（腰の痛みも含めて、写真を見ると井手さんのいう通り、昨年9月の『日ソ戦争』札幌講演に比して「生気のない表情をしている」）私のことを安藤さんと小林さんがサポートし気遣っていただいたことは感謝に絶えません。 （とみた・たけし）

やカティンの森（現ロシア領）などの写真を紹介しながら、ヤニナに対する思いを語られました。

富田さんは「カティンの森」事件の背景や経緯と、ウクライナ戦争を契機に進行するロシア国内の「歴史の書き換え」の動きについて怒りを交えて解説されました。

質疑応答でも熱のこもった発言が相次ぎ、たいへん充実した例会となりました。

その後の懇親会にも16人が参加し、初対面の方も多くなか大いに盛り上がりました。

質問用紙から

- ・ワイダ夫人が器用に箸で召し上がっていた食事は何でしょう？(ギョーザに見えましたが…)ポーランド軍団を一からつくり上げて蜂起するくだりを読んで『タラス・ブーリバ』を思い出しました。軍を作るというのがすごいと思います。
- ・旅をしながらたくさんの人とつながり、ヤニナの人物が浮かび上がる素晴らしい作品だと思います。是非テレビ番組にしてほしいです。企画はまだ生きていますか。
- ・本の209頁にドイツ軍による虐殺現場の発見後の米英など連合軍側の反応が書いてあります。では日本はこの事件に対しどう反応したのか、ご存知であればご教示ください。
- ・143～145頁にヤニナが住んでいた家に彼女の夫がたずねてきて引き続き妻の家を管理してほしいと管理人に頼んだが、その家にはドイツ人が入り込んで住み始めていたとあります。今年上映された『キャロル・オブ・ザ・ベル』(モルグレッツ=イサイエンコ監督)にも同様の場面があります。こういう事はよくあったのでしょうか。

アンケート用紙から

- ・購入した本(『カティンの森のヤニナ』)をゆっくり読みたいととても楽しみです。(富田さんの)質疑応答のお答えは熱が入り良かった。
- ・ロシアがウクライナの人々を虐殺している事実と重なり

り胸が痛くなった。小林さんと一緒に旅しながら事実を検証できて、まるで映画を見ているようでした。

- ・いまだに「カティン虐殺事件」をめぐるいろいろなことが判りまじりました。不思議なことですね。『カティンの森』(ワイダ監督)は傑作でまた観ようと思います。
- ・(小林さまは)お顔もお声も美しく素敵な講演会でした。ポーランドの歴史はそんなに詳しくなかったのですが、今日を機会に関心を深めたいと思いました。
- ・富田先生、体調悪い中、貴重なお話と資料を公開頂きありがとうございます。先生の明瞭な発表がとても良かったです。ご自愛ください。
- ・知識がない状態で参加したが、小林さんの話がわかりやすく興味を持てたので本を購入した。
- ・富田先生のお話で歴史的背景や事実を知り、今のロシア情勢を改めて考える機会となった。
- ・暗くなりすぎないようにと心を配りながら、ポーランド各地を紹介する小林さんのお話はとても楽しかったです。各地にあるモニュメントの写真が拝見できたのは良かったです。
- ・このような女性がいたと初めて知りました。女性としてすばらしい人生だと思います。あこがれる女性です。
- ・私自身固定翼の操縦士を目指していた頃もあり、大いに興味をもって拝聴。悲惨な事件であるカティンの森をひとりの人生から読み解くと、事件に関し無知な私でも私の知識の中に蓄積されていくのを感じました。
- ・とても貴重なお話でした。世界中の一人一人の平和への意識がとても大切だと改めて思いました。
- ・小林さんのレジュメたくさんの写真があってとてもわかりやすかったです。最後に小林さんからの願いがよくまとめられていて理解しやすかったです。

『カティンの森のヤニナ』を読んで 園部真幸

どこも興味深く読んだが、とくに印象に残ったのは、198頁からの「眠れる森」の一節、クレムリン大会宮殿で『白鳥の湖』を鑑賞したときの記述だ。

「このように美しい芸術を生み出す国民が、同時に悪魔の所業を犯すというのは、一体どういうことなのだろう」

これは私が長く抱き続けている「最も理想的な社会を目指したはずのロシア革命が歴史上最悪と言っている国家をつくり出してしまったのはなぜか」という疑問にも重なる。

そして、私がこの著者の鋭い感性と表現力に感服したのは、次の一文に触れたときだった。終演後帰途につくために、6,000人が一斉に無言で駅に向かって進んでいくところの描写である。

「その瞬間、私は得もいわれぬ感覚に全身を包まれた。私という個が溶けて、ひとつの大きな流れの

一部になったような気がしたのだ。その流れはうねりとなって、ひとつの方向に進んでいく。永久に止まることない営み…」



幾多の戦争や革命を経ても決して変わることはないロシアの民衆の姿。著者は一瞬の光景からそれを感じ取り、最良の言葉をもって読者に伝えている。そして、続ける。

「しかし、それは決して『個』の敗北ではないと、私は信じる。ひとりひとりに人生があり、自分だけの物語がある。そして、それらすべてに語るべき価値があると私は信じる。私の小さなコップでさえ、まだいっぱいになっていない」

ここに著者の表現者としての決意と、ヤニナの人生を追跡しようとした動機のすべてが凝縮されているように思えた。(そのべ・まさき)